性暴力・性犯罪から身を守るために
そして支えるために
～デジタル性暴力被害と支援～

NPO法人ぱっぷす
内田絵梨

2017年11月に設立した
デジタル性暴力や性的搾取による
被害の相談に対応している団体です。

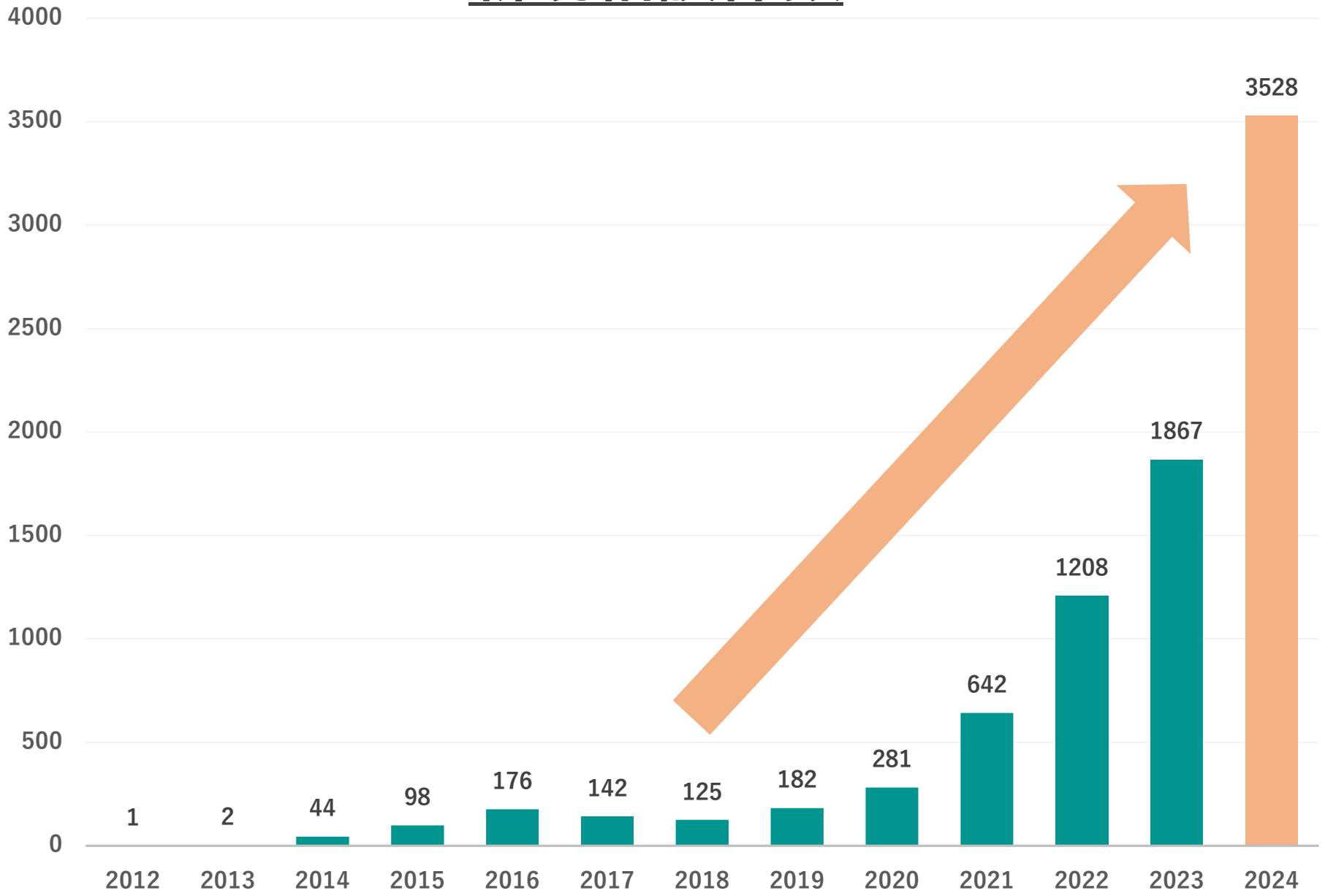
例えば・・・

児童ポルノ・リベンジポルノ・性的な盗撮のほか、

アダルトビデオ出演被害・性産業での困りごと等

※2009年～2017年「ポルノ被害と性暴力を考える会」

新規相談件数


4000
3500
3000
2500
2000
1500
1000
500
0
1
2
44
98
176
142
125
182
281
642
1208
1867
3528
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2020
2021
2022
2023
2024



相手が同意していれば

性的な写真を撮ってもいいの？

「性的同意」の自由がなくなって
自分の身体のことなのに、
自分の意思による写真や動画の
コントロールができなくなる状態



性暴力（デジタル性暴力）

すべてが性暴力

とる

性的な写真や動画を撮ること

もつ

その写真を持ち続けること

みせる

誰かに見せたりネットにアップすること

みる

撮った写真を見ること
ネットにアップされた写真をみること



SNSで知り合った人に

裸の写真を送るように言われている

「SNS」とは？

インターネット上で、文字や写真をやりとりする「交流の場」

例：LINE、Instagram、X（旧Twitter）、TikTok　など

1 だれでも無料

スマホがあれば、すぐに始められます。

2 名前も年齢も自己申告

顔も本名も分からない相手と、話せます。

3 １対１で、こっそり

DM（個別のメッセージ）は、ほかの人に見えません。

だから、知らない大人でも、親や先生に気づかれないまま
子どもと直接つながれてしまいます。



Aさんのケース

※複数の相談から再構成しています

1 出会い

スマホゲームで知り合い、家や学校でつらいとき、丁寧に慰めてくれた。
「子どもじゃなくて、ひとりの人として扱ってくれる」

2 小さなお願い

「制服の写真だけ見せてよ」→ 制服くらいなら、と送る。
次は顔写真。「可愛いね」とすごく褒めてくれる。

3 初めて断る

「裸の写真がほしい」
ここで初めて断った。

4 なりすまし・脅し

自分の名前と顔写真で、なりすましアカウントが作られていた。
「君が写真くれないから悪いんだよ」「俺のこと信用してないんでしょ」→ 止めたくて、送ってしまった。

「でも、私が送ったから」「断れなかった私が悪いんですよね」



セクストーション（性的脅迫）は
目的によって**２種類**に分けられます

支配型



相手の言動を
コントロールすることが目的

例：別れたいと伝えたら
「別れるなら画像を晒す」と言われた

金銭型



相手から
金銭を得ることが目的

例：「拡散されたくないなら3万円払え」
と言われた

Bさんのケース ― 金銭型セクストーション

※複数の相談から再構成しています

1 出会い

語学交換アプリで知り合い、仲良くなる。

2 ビデオ通話

相手とビデオ通話をした。
その映像が、録画されていた。

3 脅迫

「15分以内に、ギフトカードで15万円」
払わなければ拡散する、と言われる。

4 追い詰められる

SNSのフォロワーには同級生もいる。
相談の電話をしながら、コンビニの前まで来てしまっていた。

画像が相手の手に渡った瞬間、それは「脅しの道具」に変わる

支配型も金銭型も、「悲しませたくない」「焦り」「恐怖」という気持ちを利用してきます。



知っておいてほしい2つの法律

児童ポルノ禁止法

18歳未満

- 子どもの性的な画像の**撮影・所持・提供など**を規制
- 子どもが自分で撮影した性的な画像も対象
- 子どもを性的搾取から守るための法律

リベンジポルノ防止法

年齢に関係なく

- 元交際相手でも、ネットで知り合った相手でも
- 本人の同意なく性的な画像を公開する行為は**違法**
- 「撮影の同意」は「公開への同意」ではない

法律によって被害者が保護される仕組みがあっても、
その権利を知らなければ、相談や支援につながることは難しくなります。

ぱっぷすの取り組み

被害直後からの総合的な支援のため、４つの活動を行う。



相談支援



削除要請



アウトリーチ
居場所拠点



広報啓発

アウトリーチ：支援が必要であるにもかかわらず届いていない人に対し声掛けなどを行い福祉が積極的に働きかけて情報・支援を届けるプロセスのこと

削除要請：本人に代わって拡散した性的画像記録の削除要請を行うこと

アドボカシー：広報・啓発・政策提言などのこと

デジタル性暴力の被害救済としての「ぱっぷすの削除要請事業」

被害者が自ら削除要請をすることは二次被害に繋がる。

サイトの管理者・画像動画の投稿者に動画・画像の削除要請を行う。
相談者の顔等を機械学習し、自動で検索をかけて通知してくれるAI技術を独自開発。

ソーシャルワークの視点からぱっぷすが削除請求を行う

ぱっぷすの削除要請　2024年度

- 性的画像、動画の削除要請　　15741件
- 「全て削除」9859件



削除率６２％

ぱっぷすからの削除要請で
6～7割削除されている

拡散させない仕組み

18歳未満のかた：
https://takeitdown.ncmec.org/ja/



18歳以上のかた：
https://stopncii.org



ぱっぷすでは、相談者に対してこのツールの使い方をサポートし、SNS上の拡散を未然に防ぐことに繋げています。

①拡散された性的画像や動画から、
固有のハッシュ値（デジタル指紋）を生成

②提携しているSNS事業（Instagram、Tiktokなど）はハッシュ値と一致する画像を探す

③ポリシーに違反する場合は、
自動で画像を削除する

打ち明けられたときの「最初のひと言」

つい口から出てしまう言葉

「なんで送ったの」

加害者の「君が写真くれないから悪いんだよ」と、本人の中で同じ場所に落ちる。

→ **「やっぱり私が悪かったんだ」**

善意の言葉が、加害者の論理を補強してしまう。

まず伝えたい言葉

「話してくれてありがとう」

状況を知りたいときは

「撮られたときの状況と、そのときの気持ちを教えて」

聞いている内容は同じでも、「なんで」が消えるだけで、本人は責められていないと感じる

「とにかく消したい」— 消す前に、一度止まる

1 「とにかく消したい」

本人の切実な願い。
周りの大人も「早く消しなさい」と伝えることがある。

2 指一本で消えてしまう

証拠は本人のスマホの中。
被害者と支援者が一緒になって、証拠を消してしまう。

3 証拠がなくなってしまう

「やっぱり警察に」となっても、何が送られ、誰に渡ったのか示すものがない。

だから、消す前に**まず聞く**

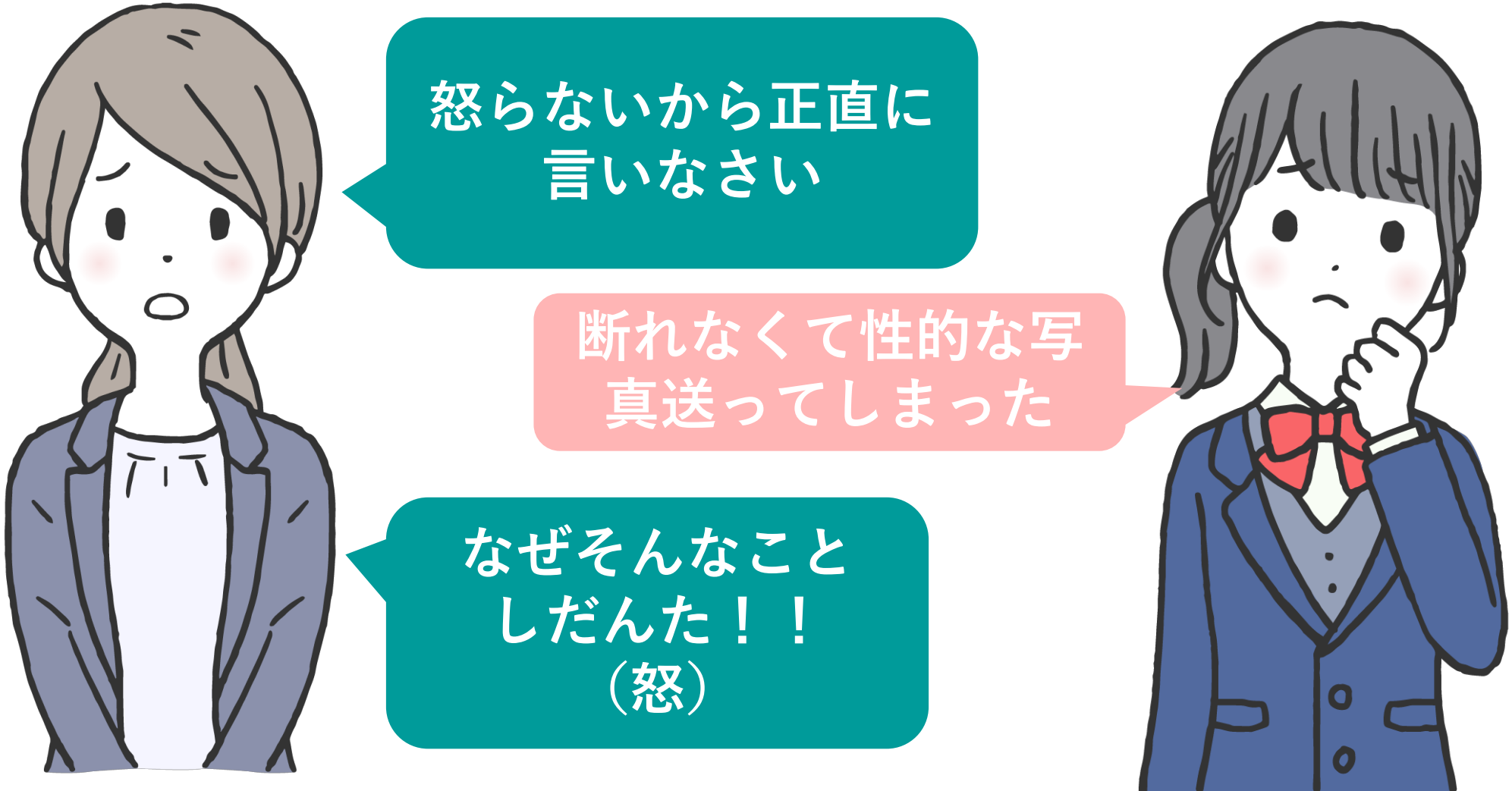
「何を、どこまで消したい？」

「何が、一番不安？」

決めるのは**本人**
大人が答えを出さない

気を付けること（ダブルバインド）

2つの矛盾した命令を他人にすることで相手の精神にストレスがかかる状態



自己責任にしないために ― 日常でできること

大人がよく言う言葉

「気をつけなさい」

「断りなさい」

「送らないように」

ぜんぶ「本人が何をするか・どうするか」の話

「送って」と言ってくる**相手**が、出てこない。

→ 何かが起きたとき、本人の心に残るのは**「自分の落ち度」**

日常の言葉に「相手」を入れる

悪いのは、
「送って」と言う相手

「断り方」を教えるより先に、

「頼んでくる側がおかしい」を当たり前にする。

それだけで、何かあったときに
「私のせい」と抱え込まずに、相談できる。

デジタル性暴力の特徴

- 性的な画像や動画が本人の意思を離れて扱われ、誰が・いつ・どのように扱うのかを自分で決められなくなる。
- 自分の身体に関するコントロールが奪われ、画像の保存・閲覧・拡散によって、被害が繰り返され、時間や場所を超えて拡がり続ける。

PAPS
ぱっぷす

ご本人だけでなく、
家族・先生・支援者の方の
相談もお待ちしています。

ぱっぷす相談窓口 — 24時間365日・匿名OK・何度でも無料

電話

050-3177-5432

※非通知は受けられません

相談フォーム

www.paps.jp

「相談する」から24時間送れます

ありがとうございました